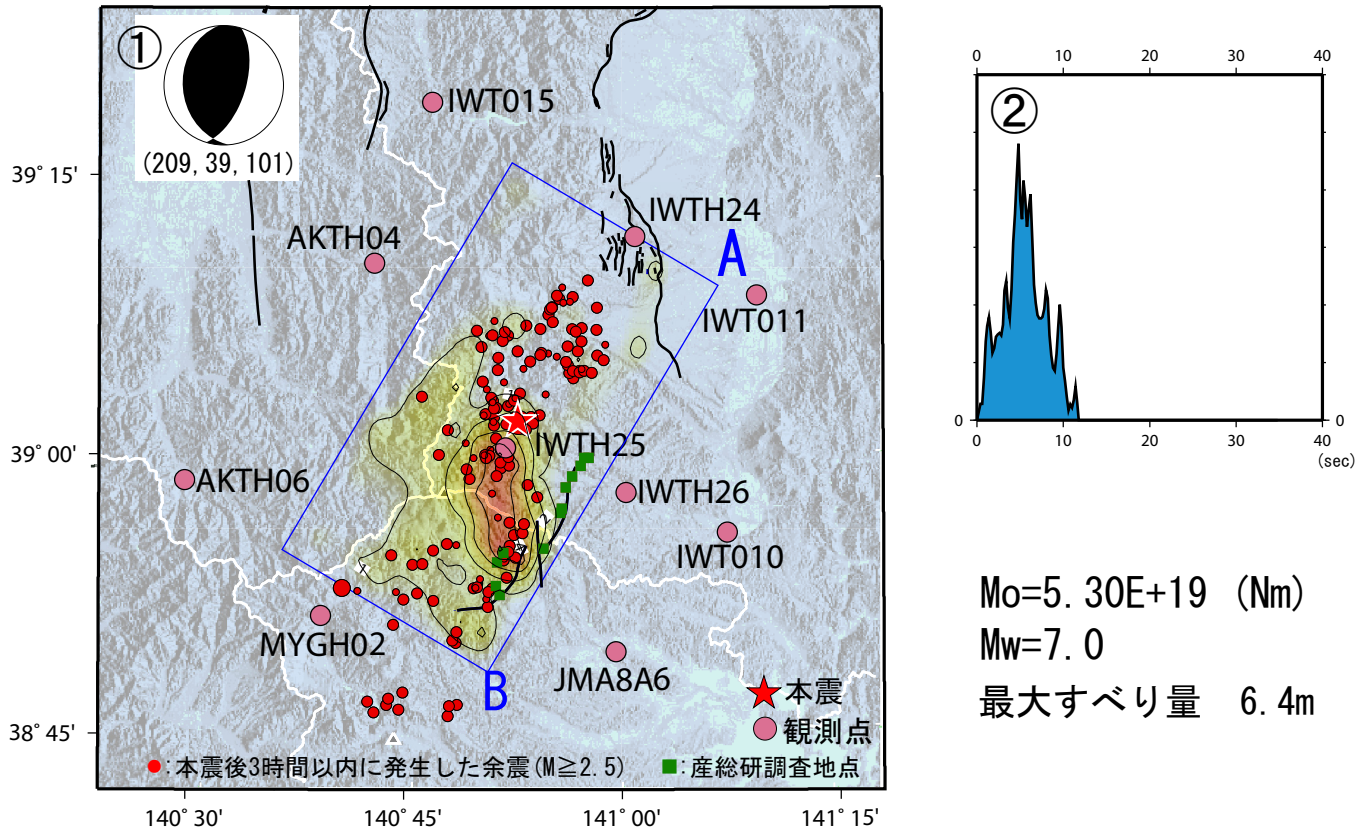


近地波形を用いた2008年6月14日岩手・宮城内陸地震のすべり量分布

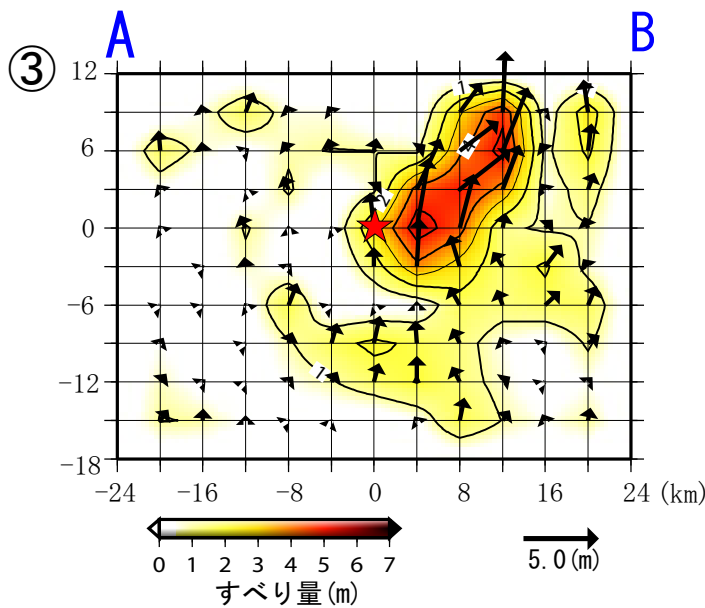
2008年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震(M7.2)について、近地地震波形を使用して震源過程解析を行い、断層面上のすべり量分布を推定した。本解析では吉田(2005)¹⁾と同様に、波形計算には武尾(1985)²⁾の手法を用い、インバージョンにはmultiple time window法を用いた。データは気象庁の震度計および(独)防災科学技術研究所のK-NET・KiK-netの強震波形を用い、破壊開始点には気象庁の本震の震源(深さ8km: 図中星印で表記)を使用した。また、断層面は気象庁の初動発震機構解の西傾斜の面(①参照)を使用した。



$M_0 = 5.30E+19$ (Nm)

$M_w = 7.0$

最大すべり量 6.4m



- ①地図上に投影したすべり量分布と観測点分布・発震機構解
- ②震源時間関数
- ③断層面上のすべり量分布

参考文献

- 1) 吉田康宏, 近地地震波形解析による震源過程, 気象庁技術報告「平成15年(2003年)十勝沖地震調査報告」, 第126号, 9-14, 2005.
 - 2) 武尾実, 非弾性減衰を考慮した震源近傍での地震波合成—堆積層での非弾性減衰の効果について—, 気象研究所研究報告, 第36巻, 245-257, 1985.
- (独)防災科学技術研究所の波形データを使用させていただきました。記して感謝します。